

## 廣瀬雄一著 『対馬海峡をめぐる先史考古学』のご紹介

本書は長年佐賀県で文化財行政に携わり、現在は釜山大学校に在籍され研究を継続されている廣瀬雄一氏の博士論文の和訳である。研究対象地域は日本列島から朝鮮半島、東アジアの広域にわたるが、長崎県の対馬がタイトルに入っていることから分かるように本県の縄文時代の遺跡、遺構、遺物の研究成果が随所に紹介されており、本県の縄文時代考古学の最新成果ともいえるもので、関係者にとっては必読書ではないかと考え、ここに紹介する。

本書は序章を含め、9章 38 節からなり、本文は 266 頁にのぼる。ここでは目次として章のみを紹介する。

序章	本書の課題と展望
第1章	本書の構想と構成
第2章	韓日新石器時代交流史とその研究動向
第3章	すべては自然環境から始まる
第4章	土器から見える交流の世界
第5章	土器文化の融合と分離
第6章	石器・骨角器はどのように伝わったか
第7章	装身具はなぜ広域に伝わるのか
第8章	交流と先史社会の構造の変化

ここからは本稿が書評であれば各章、各節に即して概略を紹介し、批評を加えていくところであるが、紹介者である古門には朝鮮半島考古学の知識がなく、そのための誤読、誤解を恐れて感想のみを述べることにする。したがって本稿は書評ではなく読書感想文と理解していただきたい。よって本稿を目にされた方は、ぜひ実際に本書を手にとって読まれることをお勧めする。

さて、文化交流や異文化同士の接触を多面的に論じた論攷や書籍はこれまでもあったが、多面のもとであるそれぞれの文化要素（本書では土器、石器、骨角器、装身具）が、対象となる文化へどのように関与し、どのような影響を与えたか、さらにそれぞれの文化要素が複合して作用した際の文化交流や異文化接触の様相、またそれらを伝えた人々と伝えられた人々の活動や日常なども明らかにし、当然、時間とともに各文化要素の拡散力や影響力に強弱があるわけで、それらを時系列でも検討考察した研究は少なかったように思う。言わば本書は多面的で重層的な先史時代の日韓文化交流の全体像を構造的に明らかにした点が稀有であり、秀逸であると思われる。

また、先学の研究への畏敬の念が著作全体に感じられ、見解が異なる研究者に対してもその姿勢は変わらない。著者の研究者としての矜持であろう。

当然ながら日韓の論文をつぶさに渉猟し立論している。それは巻末の 40 頁にも及ぶ参考文献のリストからも窺える。

総じて本書は良書である。が、学術専門書でもあり、著者の専門である土器に関する著述箇所を読破するにはそれなりの忍耐も必要である。しかし忍耐の先には知の欲求が満たされた幸福感に浸れることは請け合いである。次回は同一テーマで叢書や新書などの教養書でぜひ読みたいものである。

(文責 古門)

